

## 「いざ里山」

あまり知られていない高松の美しい風景で、私のお勧めの一つが、東植田から菅沢へ上がっていく道から北向きに高松市内を眺めたものです。夕暮れ時には、条里制の跡の残る田園風景を下地にして、メサやピュートと称される特異な山容を呈した山々を夕日が黄赤に薄く染めながら照らし出し、郷愁をそそるほのぼのとした景色が目の前に広がります。高松でも、このような<sup>でんぼ</sup>田圃里山がそれぞれの地域の人たちの様々な努力により守られながら残されてきているのが分かります。

里山とは、人間が定期的に手入れをすることによって保たれている、土地の生産が持続的で、生物多様性も高い身近な山林の総称だそうです。日本では、古来、地域共同体で手入れをしながら、これを守り育ててきました。

現在、市内では、屋島を代表格として勝賀山、紫雲山、浄願寺山、堂山、日山、峰山、六ツ目山、実相寺山など多くの里山で様々な活動が行われており、中高年を中心とした有志が香川県里山ボランティアガイド組合を設立し、ボランティアガイドとして案内をしてくれるようになっています。また、今年4月にはNPO法人格も取得されています。

地域共同体の里山保全の機能が低下している中、里山ボランティアガイドの人たちの活動がそれをカバーし、保全がなされること自体が有意義であることは言うまでもありません。その上、このような活動は、地域住民が身近な自然を見直す大きなきっかけにもなり、中高年の健康づくりに、そして未来を担う子どもたちの環境教育にも大いに役立つこと間違い無しで、これからも活動支援を通じて振興を図っていくべきものだと思います。

また、里山とその保全活動は、中高年の生きがい対策ともなり得るものだと思います。今後、団塊の世代の大量退職時代を「中高年の地域デビューのチャンス」として捉え、この里山を誘引の強力なコンテンツとしてUターン、Jターン、Iターンを呼びかけていきたい、とも考えています。

高松の里山の魅力を積極的に発信、PRして、「いざ屋島」とか「いざ堂山」などの気概を持った、いわば「里山御家人衆」にたくさん来てもらえれば有難いと思っています。